

〔研究ノート〕

大学は小学校ではない，か？

高 田 里 恵 子

パラからマージナルへ

1990年代に入ってから大学の数が増えていったことには厳しい批判や辛辣な皮肉が投げつけられている。グローバル化の波は高校卒業者の雇用機会を奪い、仕方なく大学進学を選択せざるを得ないという層を生みだしたと表現されることもある。増えた大学が大学生を増やしたのか、大学生にならざるを得ない若者の増加が大学の濫造を導いたのか。いずれにしる「下流大学」の存在は衰退日本の象徴のように見なされ、その自然淘汰や天罰的消滅が大いに語られる、いや揶揄されるか。

そうした状況にたいして、勇気と誠実さを以って抗議したのが、労働経済学者の居神浩、「ノンエリート大学生に伝えるべきこと——『マージナル大学』の社会的意義」という題名をもつ居神の論文である。この題名だけで、あるいはすべてをあらわそうとしているのかもしれない。従来の伝統的大学の姿からは想像できない、辛うじて大学と呼んでよいものの隅っこに引っかかっている大学が「マージナル大学」と名付けられている。そこで「学ぶ」大学生、すなわち「ノンエリート大学生」を育てあげるもののなかに、居神は、Fランなどと無責任に蔑まれる大学のレゾンデートル

キーワード：新制大学，大学の学校化，大学の大衆化，ドイツの大学改革

を見いだそうとする。

簡単にまとめると、放置してしまえば社会的弱者になるかもしれない若者たちに「雇用されうる力」(employability)と、労働法を無視した職場に抵抗する能力である「異議申し立て力」を身につけさせる場所として、「マージナル大学」は社会的意義を備えているというわけだ。そして、そこでの教育を担う「教員は(とても難しいことなのだが)研究者としての実存にこだわることなく、学生の『分からなさ』にとことんまで付き合うべきであろう」と居神は言う。しかも、それは「初等教育内容の『分からなさ』とのつきあい」である¹⁾、と。

さて、しかしながらここで行ないたいのは居神とともに「マージナル大学」の社会的意義を再確認することではない。また、言うまでもなく、「分数ができない大学生」の存在を嘆こうというのでも、研究者か教師かと悩む大学教員の悲惨を語ろうというのでもない。

あとでもう一度触れるが、大学大衆化の問題はすでに戦前から浮かびあがってきていた。大学に行きたいと思う人間はずっと増え続けてきたのである。若者たちが(よりよい)大学に行きたがるのは基本的には(よりよい)就職口を得るためであるが、にもかかわらず、あるいはそれゆえに、そのことは堂々とは口にされなかった。大学は就職斡旋所ではないというような否定のかたちで登場することのほうが多かったと言える。現在でも、中核に位置する大学は就職を特に強調することはなからう。就職率の高さを喧伝するのはむしろ「マージナル大学」の特徴の一つなのかもしれない。居神の新しさは少しも悪びれずに就職の切実さ、そしてまた大学教員の(研究者ではない)教師としての役割を前面に出したことである。大学の「大衆化」を嘆いていられた時代は、まだまだ気楽なときだった。

大学の数が増えすぎたと最初に嘆かれたのは昭和初年のころである。1918(大正7)年の大学令によって、帝国大学以外の大学の設置が認めら

大学は小学校ではない、か？

れた。加えて、高等学校令の改正にともない、(旧制)高校の数もぐっと増える²⁾。ヨーロッパの混乱によって漁夫の利を得た大日本帝国の好景気に支えられての高等教育機関の増大であったが、第一次大戦後の不況、何より世界恐慌後の大学生就職難は無計画な(?)大学増設への批判を呼びおこした。また当時、国家にたいして批判的と見なされた教授の追放や大学の自治をめぐるさまざまな大学論が噴出していたが、森戸辰男(1888～1984)が『改造』に発表した「大学の顛落」(1929)はそのうちの最も有名なものであろう。「大学の顛落」、それはまるで、『中央公論』がここ二十年ほど毎年恒例(か嫌がらせ)のように組んでいる大学特集の題名の第一号のようではないか。大学の失墜、大学の崩壊、大学の凋落、大学の迷走……というように、「大学の」のあとにはありとあらゆる絶望的な単語が入ってくる。

もっとも、『中央公論』の大学批判は戦前からの伝統であるらしい。1930年の不況のさなかに書かれた文芸評論家青野季吉(1890～1961)の論考「学生製造企業会社論」は、その題名が示すとおり、大学(とりわけ私立大学)も企業のような金儲けだけを考え、学生もまた就職目的によって大学に入ってきていると批判する。だがこの就職難の時代にあって、「明らかに修学を投資として考え、修学後の商品としての自己の販路に腐心しながら、この商品『卒業生』が、市場で利潤を副えて捌かれること、否、そもそもその買手があることが、今日では寧ろ例外的なのである」³⁾。明治時代の、大学卒業生がほんの少数であったときならいざ知らず、いまでは大学も大学生も多すぎる。

数字の示すところによると、現在日本の高等教育施設のうち、単に大学だけで見ても、校数三四、教職員数四、二一九、学生数四六、七〇〇(大正一四年度。帝国統計年鑑。)に達している。これを明治三五年に比

べると、学生数において約十倍の増加であり、大正元年に比べると約六倍の激増である。かかる激増は、言うまでもなく、一方に日本の文化的発達を物語るものに相違ないが、他方に、大学施設それ自身については、それが愈々益々企業化したことを有力に物語っている⁴⁾。

ちなみに現在の大学数は779校、学生数は約280万人（平成27年度文科省学校基本調査）であるが、それはさて置き、問題になっているのが、大学が文化や学問の中心地というより、サラリーマン養成所のようになっており、しかもそれ程うまく機能していないということなのは明らかだろう（戦後の高度成長期にのみ大成功を収めたわけだが、それにはいまは触れない）。

この昭和初年のころ、「職業補導所」と化した大学を最も厳しく批判したのは、我が国経済学の草分けたる福田徳三（1874～1930）である。1927年に福田はこう言った。「なる程名前は大学であり、教授の官等は高い。だが単なる職業大学に過ぎなくはないのか」、「職業教育を施して實際家を造るのを目的とする『単科大学』が何で大学であるか」⁵⁾。

ここで「単科大学」と言われているのは現在の一橋大学、当時の東京商科大学で、1920年に例の大学令のおかげで東京高等商業学校から大学へと「昇格」していた。福田はみずからも出身者であるこの大学の教授であった。

一橋のどこに大学の精神が存するか？ 一橋が真の大学であるとは誰も思うはずがない。チブスに本チブスとパラチブスとある、それを借りて言うならば一橋はパラ大学だ。そのパラ大学の現状を以て満足している教授が本学には沢山いる。「一橋が大学でない」事にすら気のつかぬ人が多い。私が一人憎まれ者になってこう言うのも、真に一橋を思うから

大学は小学校ではない、か？

であり、そして諸君に此話を聞かせ度いのは、諸君はともかくも受験の難関を経て来た人材なのだから、諸君に覚醒してもらおうが為である⁵⁾。

「マージナル大学」という言い方がある種の決意を含んでいて、結局のところけっして卑下した表現ではないように、みずからの大学を「パラ大学」と呼ぶ態度にも（巧まざるユーモアを別にしても）大きな自負が込められている。福田はまた、就職に有利になるようにと、勉強しない学生たちにも適当に優良の成績を与えてしまう私立大学を名指しで非難している。「私立大学に至っては、採点の手加減、学生訓育の不十分、拙者到底之れに堪えず、故に十数年来一切の私立大学と全く絶縁して今日に及べり。（慶大、中央、日本大学）」⁶⁾。この厳しい言葉を見れば、むしろ我が「一橋」にたいしては改革の可能性を認めていることがわかるだろう。

それにしても、パラとマージナルのあいだに流れた長い歳月は決意や自負のかたちを正反対のものにしてしまった。つまり、先走って言うならば、福田が目指したのは脱学校たる大学であり、それにたいして「マージナル大学」のほうは大学の体面にはもはやこだわらず、堅実に学校へと（時に小学校へと）回帰しなければならないことを宣言しているのである。この問題について少し詳しく見ていこう。

受動的学習批判の長い伝統

福田徳三は高根義人（1867～1930）とともに論じられることが多い。教育学研究の分野ではなかなか人気のある人物であると思われるのだが⁷⁾、この場所では彼らの主張を特に取りあげることはしない。二人ともドイツの大学に留学し、ドイツ型の大学教育を絶賛し日本に導入することを目指した。高根は、教育社会学者潮木守一の『京都帝国大学の挑戦』（1984）の主人公であるように、1900（明治33）年に、当時設立されたばかりだっ

た京都帝国大学法科大学の教授となる。そして1902年に「大学の目的」と「大学制度管見」という二つの論考を発表し、東京帝国大学とは違った教育理念を打ちだした。

高根の主張と京都帝国大学法科大学の新しさを、本人よりも詳しく説明しているように映るのは、斬馬劍禪が1904（明治36）年に読売新聞に連載し人気を博した『東西両京の大学』である。題名のとおり、東京帝国大学と京都帝国大学の法科大学を比較しているものだが、「斬馬劍禪」はもちろん本名ではなく、みずからも東京帝国大学法科大学出身の政治学者のペンネームであるという⁸⁾。

東京帝国大学は果たして大学の名に値するのかと斬馬劍禪は問う。「大学は素より小学中学と大いにその趣を異にす。而してその小学と異なり、中学と径庭ある所以の者」、それは那辺にあるか。設備の豪華さか、教授の官位の高さか、運動会に臨御あることか、卒業式で銀時計がもらえることか、頭の上の角帽と鼻の下の美髯のおかげか。「大学の大学たる所以は決してかかる末節に求べきにあらずして、その制度が果して大学にふさわしきや、その学生を遇するの途、果して大学らしきやによりて決せざるべからざるものなるを」⁹⁾。

しかるに見よ、我が東京大学のごときは、ある科においては日々学生の出席欠席を調査し、ある教師のごときは遅刻者に向かいて減点をなすべしと威嚇するというがごとき、これ果たして大学学生を遇するの途なるか。〈中略〉これ要するに今の東京大学のその学生に対するや規則をもって束縛し、権力を用いて干渉し、徹頭徹尾小学校流の方法をもって彼等を教育せんと欲す¹⁰⁾。

高根義人はドイツの大学の「自治自修自制ノ精神」¹¹⁾を称えた。ドイツ

大学は小学校ではない、か？

の大学は学生がただたんに教えを受けるのではなく、みずから積極的に「研究」にかかわっていく場所である、と。しかるに、東京帝国大学のやり方では「受動的勉強心」を起こさせ、「採集の記憶力」を強化するにすぎないのではないか¹²⁾。

だが、われわれにとってはこういう主張はすでに聞き慣れた、あるいは聞き飽きたものであろう。高根はフンボルトの名を挙げていないが¹³⁾、大学の自由に基づく、研究と教育の一体化を謳ったフンボルト理念や19世紀から20世紀にかけてのドイツ大学の学問水準の高さ（とりわけ自然科学）は、いまでも歴史的事実としてしばしば言及される。『教養と無秩序』で知られるイギリスの評論家マシュー・アーノルト（1822～88）は19世紀の終わりのころすでに、“The French University has no liberty, and the English universities have no science; the German universities have both.”などと褒めている¹⁴⁾。

受動的学習は本当の勉強ではない、自由に学んでいこうとする力が大事だといった言説は、ここ百年ほどずっと生産されつづけているわけだが、社会学者の佐藤俊樹は次のように皮肉っている。「ついでに言うと、『東京大学は詰め込み教育だからだめだ』と最初に嘆いた記録は、私の知るかぎりでは、京都大学の創立時までさかのぼる。言った人がその後どうなったかは、興味があれば潮木守一『京都帝国大学の挑戦』（講談社学術文庫）を読んでほしい¹⁵⁾。高根義人は結局、改革を成功させられず、1907年に京都帝国大学を去る。

ドイツの敗北、しかも初めての

さて、われわれの文脈で注目したいのは、高根義人が、大学は小学校や中学校とは違うのだと繰り返しかえし主張していることである。アメリカの大学の制度や教育方法は（「二三ノ著名ナル大学」を除外して）「中学ト扱ム

コト無シ」と高根は言う。もっとも、「思フニ米国ノ所謂 University ト云ヒ College ト云フモノハ我邦従前ノ高等中学ト相似タルモノ」にすぎないのだから別に不都合はあるまい、と¹⁶⁾。

もう少し例を挙げよう。帝国大学文科大学長であった外山正一（1848～1900）の『教育制度論』（1900）の一節である。

今の大学の仕組では、何百人の学生でも同年に入学した者は、学科学科に依て一定の課程を踏ませて、数年の後には彼等悉皆に卒業証書を与えて一斉に入りたる如くに又一斉に出さんとするの仕組である、恰も大学の学生を心太か欣葉ところてん かんてんの如くに取扱うのである、小学校の生徒若くは中学の生徒であるならば斯の如き取扱も固より当然の事であるであろう、去り乍ら大学の学生の取扱としては決して適当なものでは無いのである¹⁷⁾、

教育社会学者の竹内洋によれば、この発言は「ところてん」をこうした意味で、つまり入学してしまえば押し出されるように卒業できるという意味で使用した第一号であるらしい¹⁸⁾。もっとも、卒業が楽ちんなのは困ったものだと言っているというより、小学校や中学校のような学級制は大学の本質に反するとの意見であろう。1918（大正7）年の大学令のあと、一部は現在のような科目選択制が取りいれられるようになり、この点で「小学流儀、中学流儀を廃さんければならぬのである」¹⁹⁾という外山の願いが叶った。大正期、東京帝国大学も、批判されつづけた暗記教育と点数主義を打破すべく論議と改革を重ねた²⁰⁾（おそらく現在も東京大学はこの手の批判を運命として甘受し、つねに改革を目指していると思われ、はなはだ同情に値する）。

要するに日本の大学は脱学校化の途をそれなりに努力して歩もうとして

大学は小学校ではない、か？

きたと言える。ただし、これは過去形で言わねばなるまい。高根義人が「中学ト択ムコト無シ」と評したアメリカの大学（正確に言えば、undergraduate もしくは college）を範にした大学改革が今世紀に入ってからドシドシ進められている。肯定的にとるか否定的にとるかは措くとして、大学はいま、反対に学校化の途を歩もうとしているのである。近ごろは自分のことを「生徒」と呼ぶ大学生が増えたという指摘があるが²¹⁾、大学の学校化の雰囲気を感じとったゆえの所作なのではなからうか。

日本では最初、諸学校で学ぶ者をすべて生徒と呼んでいたが、ヨーロッパでは大学で学ぶ者とそれ以下の学校で学ぶ者とで名称を区別することに倣い、1881（明治14）年より、東京大学（帝国大学の前身）の各学部本科に学ぶ者だけが学生と名のつてよいことになったのだという²²⁾。学生は誇りに満ちた言葉であった（ちなみに、アメリカ英語ではハイスクールの生徒でも student というが、ドイツ語では Student は大学生のみを指す）。たしかに、昔の邦画などに登場する「学生さん」という呼びかけにはある種の尊敬が込められていたような気がする。

しかしながら、この学校化＝アメリカ化の衝撃をさらに大きく受けているのは、日本の高等教育における脱学校化志向の手本となっていたドイツの大学である。「学校化する」も「アメリカ化する」も、日本語の場合は自動詞にも他動詞にも使用できるが、ドイツ語の *verschulen* や *amerikanisieren* は他動詞であり、やや被害者めいた受動文であられることも多い。

敗戦後のアメリカナイズのありようはドイツも日本も多少似ているが（チューイングガムなど）、しかし教育に関しては、しばしば指摘されるように大きく違っている。西ドイツでは、敗戦後もアメリカの勧告を受けての学校制度改革はほとんど進まなかった。特に大学は変化しなかった、あるいは、ナチス時代以前の本来の姿に戻った。日本の戦後の新制大学に

については、ある時期まで、アメリカのせいで旧制度の良いところが壊されてしまったといった嘆きや不満がよく聞かれただろう。たとえば、1957年の発言であるが、大学基準協会や大学設置審議会の委員まで務めた大学教師は本音をこう告白する。「だが、実を言えば新学制に対して初めからかなり批判的であった。それは米国から押しつけられたものか——もしそうならば独逸ほどではなくとも、もう少しはレジスタンスを示すべきであったろう、——もしまたある人々のいうようにその採用が日本の発意であったならば、責任はこちらにあって、他に文句のもってゆきようもない訳である」²³⁾。

ドイツがアメリカの勧告を受けいれなかったこと、しかし日本の改革も実はGHQという外圧を利用した日本人自身の発意であったことはすでにこのころから言われていたわけである。アメリカは教育の中央集権的構造の解体を主張し、中央官庁の文部省の廃止を提案したが、日本は（と言うか文部省は）これをイヤダイヤダと泣いて拒み、反対にドイツは積極的に採用しているので、取捨選択や「レジスタンス」の余地がなかったわけではない²⁴⁾。

いずれにしろ、敗戦国日本の大学のほうが早くにアメリカに屈服したので、あるいは敗戦とは関係なく、すでに戦前からアメリカ的な制度を受けいれている部分もあり、現在のドイツほどの敗北感は日本にはないと思われる。そもそも日本には近代大学発祥の地というような誇りもない。フンボルト神話やベルリン大学やら、ドイツの大学論議には参照すべき伝統が重くのしかかってくる。

1999年以降、大学制度もヨーロッパ内で統一していこうという動きのなかでポーロニヤ・プロセスが導入され、ドイツの大学に学士課程・修士課程や単位制度（ヨーロッパ単位互換評価制度）、学期末試験やモジュール制やシラバスなどのアメリカ産規則が入ってきた。ドイツの大学はこれま

大学は小学校ではない、か？

で独自の道を歩んでいただけに、急激なアメリカ化への違和感や抵抗感は強い。

このボローニャ改革、つまりアメリカ的システム導入の失敗を指摘する大学関係者が揃って口にするのが、学校化の危険である²⁵⁾。われわれにとっては、単位制度も学士課程もない大学なぞというのは想像しにくいであろうが、こういうものに縛られていなかったかつてのドイツの大学にはたしかに一種独特の自由があった。何年間かで卒業しなくてはいけないという考え方、そもそも卒業という制度がなかったので、長く大学に留まる者も少なくなかった。単位取得のための試験勉強、モジュール化で狭められた科目選択の可能性、3年間の学士課程。これらが、フンボルトの言う「学びの自由」(Lernfreiheit)と「教授の自由」(Lehrfreiheit)を損ない、大学を学校へと墮落させるものだと感じる(おそらく年配の)大学教員たちがいるのは当たり前であろう。ここでフンボルトの「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的施設の理念」(1809・1810)のなかの有名な一節を引用しておこう。大学は学校(Schule)とは明確に区別されるべきだ、とフンボルトは主張した。

さらに言えば、つねに学問をまだ完全には解決されていない問題として扱い、それゆえにつねに研究しつづけることが、高等学問施設の特徴である。それにたいし、学校というものは、もう解決されてしまった既成の知識とのみ関わり、それを学ぶ場所にすぎない²⁶⁾。

これもまた、いまでは特に新しい見方とは映るまい。そしてよく考えてみると、たとえば「マージナル大学」の学生(生徒?)に欠けているのは「既成の知識」の取得なのである。

ドイツにおいても、むしろ学校化こそ大事なのではないかという意見が

ある。先進国のなかで最も低い大学進学率を誇っていたドイツでも、いまや同年齢の40%が大学に進む。フンボルト理念が通用したのは大学進学率が1%のころではないのか、と。2015年4月に、ドイツの高級紙であるZEITに載った記事の題名はこうである。「学校化？ ええ、お願いしますとも！」 („Verschulung? Ja bitte!“)²⁷⁾

大学は学校の長所を取りいれるべきなのではないか。学校化は特に人文学関係者から攻撃を受けているが、文系学問こそもっと学校から学ぶべきなのではないか。「学校化はたしかに嫌な言葉だが、しかし Mehr Schule wagen (もっと「学校」を思い切って進めよう)こそ大学教育の将来にとって望ましいスローガンなのだ」という文で記事は結ばれる。

Mehr Schule wagen というのは、社会民主党のヴェリリー・ブランド(1913~92)が1969年に首相になったおりに発した有名な言葉, „Wir wollen mehr Demokratie wagen.“ (「われわれはもっと民主主義を思い切って進めることを望んでいる」) から来ているのだろう。

こうした学校化の背景には、繰り返しになるが、大学の急激な民主化(つまり大衆化)があるわけで、記事では次のように述べられている。「大学生の変動幅が今日では以前に比べ大きくなっている。学校の生徒の場合と同じように、出自も能力もそれぞれ大きく異なっている」²⁸⁾。

かくて、この段階になってはじめて日本の大学は憧れのドイツ大学にかつてなかったほど近づけたのである。

ドイツとアメリカの悪いとこ取り

日本の大学は国内でも外国からも褒められることはきわめて少ないのだそうである。しばしば批判の対象となる。現代に限ってのことではない。大学学長も務めたアメリカ人教育家チャールズ・フランクリン・スイング

大学は小学校ではない、か？

(1853~1937) の『世界の大学』(1911) なる本には東京帝国大学も登場するが、学生たちのありようはこんなふうを描かれている。“The Japanese mind is a rather knowing than a thinking. It is rather acquisitive than inquisitive, although in inquisitiveness it is not wanting. It is rather a memorizing than a reasoning mind.”²⁹⁾

これも現在では言い古された日本人批判であろう。また、“German origin”³⁰⁾ を誇りながら、結局のところドイツの精神は受け継いでいないという話でもある。以後、何度も見かけることになる言説だが、それでも次のような発言にはいまさらながら苦笑せざるを得ない。ハワイの捕虜収容所長として、本当の戦況を伝えようとする日本語新聞（宣伝ビラ）を編集したことで知られるオーテス・ケーリ（1921~2006・当時同志社アモースト館長）が1976年にこう言っているのだ。

悪くひびくかもしれないが、何だかヨーロッパの大学制度の一番悪いところと、アメリカの大学制度の一番悪いところが重なってできあがったのが、日本の新制大学だというふうにかがえる。早く言えば、週一回の講義と、科目一つには学年末に一回のみの試験というヨーロッパの大学におけるやり方と、アメリカの、特に州立大学のクォーター・システムにおける一年三十単位という時間数の数え方との抱きあわせとなってしまったのである³¹⁾。

欧米の制度のいいところ取りをして近代国家を築きあげた（と言われる）日本も、こと大学制度においては失敗したのだろうか。とまれ、ちょうど1976年ころに大学生であった筆者には、ここで言われていることはよく理解できる。学生の自主性を尊重するヨーロッパの大学の放任主義が日本風に変形したことと、学生に中学校の生徒のようにきっちり勉強させるため

のアメリカ的単位計算方法が日本風に形骸化したことが相俟って、勉強しなくとも卒業できる文系学生を量産したわけである。

評論家で英文学者の福原麟太郎（1894～1981）のコメントは大学教員の側からの愚痴であろうか。1962年、新制大学発足から十年以上が経ったころの述懐である。

今までの旧制大学がかかえていたドイツ風な学問の内容やその分類がそのまま新制大学で継承され、すこし誇張して言うと、ドイツ学風が、新制大学の数だけ日本中にばらまかれたという有様になったのであった。これはその限りにおいてアメリカの失敗であり、日本の悲劇でもあった³²⁾。

ここで「ドイツ学風」と言われているのは別に褒め言葉ではなく、「大学は学校ではない」というドイツ大学的な態度（傲慢?）である。そして、アメリカ人教授は日本に来てはじめて、アメリカの真似をして作られたという新制大学がアメリカの大学に似ていないこと、「アメリカの失敗」に気づく。新制大学への一般教育導入に大きな影響を与えたジェイムズ・コナント（1893～1978・ハーヴァード大学元学長）は1961年に来日したおり、「戦後の日本の教育は、基本的には、アメリカの教育制度をもとにして改革されたということをききました。ところが、日本にまいりまして、これくらいまちがった見かたはないということがわかったのであります」³³⁾とまで言っている。

アメリカの大学関係者はおおむね日本の教育改革を信用していないようなのだが、たとえば、『マッカーサーと吉田茂』などの著書で知られ、1947年から52年まで外交官として Occupied Japan に駐在したりチャード・フィン（1917～1998）は1993年に江藤淳（1932～1999）と対日占領体制の

大学は小学校ではない、か？

評価をめぐって対談したおり、教育政策には「ある程度うまくいった」という合格点Bを与えている。「教育は大成功だったと、アメリカ人は今でも思っていますが、日本の教育制度はリーダーや思想家を生まないという欠陥も指摘されています」³⁴⁾。

この「大成功」はしかし、主に初等・中等教育の民主化を指しているのだろう。大学教育については、リチャード・フィンの妻である建築史家ダラス・フィン（1919～2012）が辛辣に的の確な批判を下している。ダラス・フィンは夫の在任中に Occupied Japan の諸大学で教えた。つまり誕生直後の新制大学を体験したわけで、この新しい日本の大学の性格を見抜いた最初のアメリカ人となる。

その1955年の論考のなかで、フィン夫人は、日本の大学の変革は実は上っ面にすぎず、「本質的に日本的である内部は残っている」³⁵⁾と断罪する。「日本的」とは次のようなものである。

授業のやり方は、日本人から一般に「欧州的」といわれるが、軽率といえるほど無頓着である。〈中略〉合衆国においてあれほど称讃されている規則立った教授法は、日本では大して尊重されていない。〈中略〉たとえば日本の経済学の教授は、その一学年用のテキストとして、学生たちの能力に即応した書物の代りに、晦渋で高等な経済学の論文を選ぶに違いない。〈中略〉教授や学生は、日本の大学のだらしない切り盛りにもこのように良く耐えてきていることについて称讃に値する³⁶⁾。

ここまで言われるとむしろスガスガしい気持ちにもなるが、もう一つ、これはアメリカにおける大学生（undergraduate）の生徒的ありようをよくあらわしていると思われる一節を引用しておこう。

アメリカの社会では、大学生というものは、助力を受けることなしに自分のことを処理して行けるほど成熟しているとは考えられていないが、それとは異なって日本の社会は、学生を一人で放り出してしまう。郷里にいる彼の親族を除いては、その学生がどうなろうとも、誰も構わないのである³⁷⁾。

たしかに、昭和の大学生たちはかくも無頓着で冷淡で、その上だらしないうちを通過してきた。しかし、学校に学校を重ねてようやく到達した、学校であってもはや学校ではない場所で享受しえた「大人」の自由は（それがまだ辛うじてある程度特権性を帯びていたことに無自覚ではないが）彼らにとって、かけがえのない思い出になっているはずなのである。

注

- 1) 居神浩「ノンエリート大学生に伝えるべきこと——『マージナル大学』の社会的意義」『日本労働研究雑誌』602号（労働政策研究・研修機構，2010年9月）35頁。
- 2) 第一次大戦後から太平洋戦争にかけての戦間期に、その後も続く日本の高等教育大衆化の構造がほぼ固まったと見られている。この問題については、以下の文献を参照されたい。
伊藤彰浩『戦間期日本の高等教育』（玉川大学出版部，1999）
天野郁夫『高等教育の時代——戦間期日本の大学』上・下（中央公論社，2013）
- 3) 青野季吉「学生製造企業会社論」『中央公論』（1930年5月号）61頁。
- 4) 同57頁。
- 5) 福田徳三「大学の本義（一）」『一橋新聞』第51号（1927年5月16日付）
- 6) 福田徳三「本会の照会に対する学者、実業家諸氏の回答」日本経済連盟会編『大学及専門学校卒業者就職問題に関する調査資料』（1929）99頁。
- 7) 高根義人，福田徳三については次の文献を参照されたい。
潮木守一『京都帝国大学の挑戦』（講談社学術文庫版，1997）

大学は小学校ではない、か？

- 菊池城司『近代日本における「フンボルト理念」——福田徳三とその時代』
高等教育研究叢書53（広島大学大学教育研究センター，1999）
金子勉『大学理念と大学改革：ドイツと日本』（東信堂，2015）
- 8) 潮木守一「解説」斬馬剣禅『東西両京の大学——東京帝大と京都帝大』
（講談社学術文庫版，1988）を参照のこと。
- 9) 斬馬剣禅『東西両京の大学』20頁。
- 10) 同24—25頁。
- 11) 高根義人「大学の目的」『法律学経済学内外論叢』第1巻第2号（宝文館，
1902）124頁。
- 12) 同131頁。
- 13) 潮木守一「フンボルト理念とは神話だったのか——パレチェック仮説との対
話」『大学論集』第38集（広島大学高等教育研究開発センター，2007）を参
照されたい。表題に見られるパレチェック教授によると，フンボルト理念は実
は19世紀のあいだは忘却されており，1910年のベルリン大学創立百年記念に
あたり，当時すでに自然科学の隆盛に押されがちだった人文学の研究者によっ
て守護神として担ぎだされるようなかたちで復活したのだという。高根義人
が1902年の時点でフンボルトに言及していないことはパレチェックの説を補強
するものかもしれないと潮木は指摘する。
- 14) Matthew Arnold, *School and Universities on the Continent*, ed. R. H. Super,
（Ann Arbor: University of Michigan Press, 1964）164.
- 15) 佐藤俊樹「大学が気楽に消費される時代——『ドラゴン桜』と「ホリエモ
ン」が暴いた「大学」のリアル」『中央公論』（2006年2月号）97頁。
- 16) 高根義人，前掲論文130頁。
- 17) 外山正一『教育制度論』（富山房，1900）98頁。
- 18) 竹内洋『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』（NHK出版，1997）
67頁。
- 19) 外山，前掲書100頁。
- 20) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史二』（東京大学出版会，
1985）273～284頁参照。
- 21) 大学生の「生徒」化については次の論文を参照されたい。
伊藤茂樹「大学生は『生徒』なのか——大衆教育社会における高等教育の対

- 象』『駒澤大学教育学研究論集』第15号（1999）
- 濱島幸司「大学生は『生徒』である。それが、なにか？——1997年・2003年調査データより」『上智大学社会学論集』第29号（2005）
- 22) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史一』（東京大学出版会，1984）631頁。
- 23) 高橋里美「新制大学について」『新制大学の諸問題』（大学基準協会，1957）18頁。
- 24) GHQの民間情報教育局が文部省の官僚統制を排除しようとしたことに関しては次の文献を参照されたい。
- 寺崎昌男「占領と教育改革」大田堯編『戦後日本教育史』（岩波書店，1978）91頁。
- 海老原治善「祝福されず新制大学誕生」『朝日ジャーナル』（1969年12月14日号）35頁。
- アメリカ占領下のドイツが教育の地方分権化を率先して実行したことについては、下記の文献を参照のこと。
- Masako Shibata, *Japan and Germany under the U. S. Occupation: A Comparative Analysis of the Post-War Education Reform*, (Plymouth: Lexington Books, 2008) 164.
- 25) ボローニャ・プロセスに対する批判については下記の文献を参照されたい。
- Jürgen Kaube, „Vorwort,“ *Illusion der Exzellenz. Lebenslügen der Wissenschaftspolitik*, hrsg. von Jürgen Kaube, (Berlin: Verlag Klaus Wagenbach, 2009)
- Wolfgang Eßbach, *Jenseits der Fassade. Die deutsche Bachelor-/Master-Reform, Illusion der Exzellenz.*
- Christine Burtscheidt, *Humboldts Falsche Erben. Eine Bilanz der deutschen Hochschulreform* (Frankfurt, New York: Campus Verlag, 2010)
- Julian Nida-Rümelin, *Der Akademisierungswahn. Zur Krise beruflicher und akademischer Bildung*, (Hamburg: edition Körber-Stiftung, 2014)
- 26) Wilhelm von Humboldt, „Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin“ (1809 o. 1810), in: *Wilhelm von Humboldt, Gesammelte Schriften*, hrsg. v. d. Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 10, (Berlin, 1903) インターネット公開テキスト (<http://>

大学は小学校ではない、か？

kw1.uni-paderborn.de/fileadmin/kw/institute-einrichtungen/historisches-institut/personal/klenke/HS_StudentengeschichteSS08/HumboldtWilhelm-gekuertzt.pdf)

和訳にさいしては、フンボルト（梅根悟訳）「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的施設の理念」『大学の理念と構想』（明治図書、1970）を参照させていただいた。

- 27) Volker Meyer-Guckel, „Verschulung? Ja bitte!“ In: *Zeit*, 9. April 2015.
なお、一週間後のZEITには、注の25)に挙げた哲学者ニーダ＝リュームリンによる反論「精神の学校化」が掲載された。Julian Nida-Rümelin: „Die Verschulung des Geistes.“ In: *Zeit*, 16. April 2015.
- 28) ドイツの大学はほとんどが国立大学であり、また階層化されていない。そのせいで、大学の大衆化（高等教育のユニバーサル化）の過程においてアメリカの州立大学や日本の私立大学が果たした役割を担う場所が存在しないために、学生間学力格差に起因する混乱は日本の場合より大きくなっている。この問題に関しては下記の文献を参照されたい。
天野郁夫「日本高等教育システムの構造変動：トロウ理論による比較高等教育論的考察」『教育學研究』第76巻第2号（2009）
Mitchel G. Ash, *Bedeutet ein Abschied vom Mythos Humboldt eine Amerikanisierung der deutschen Universitäten?*, *Mythos Humboldt. Vergangenheit und Zukunft der deutschen Universitäten*, hrsg. von Mitchell G. Ash, (Wien Köln Weimar: Böhlau, 1999)
- 29) Charles Franklin Thwing, *University of the World*, (New York: The Macmillan Company, 1911) 267.
- 30) Thwing 262.
- 31) オーテス・ケーリ「国際化と私立大学の役割——外国人教員の立場から」『大学時報』128号（1976）35頁。
- 32) 福原麟太郎「文学部組替え論」『中央公論』（1962年3月号）36頁。
- 33) 『コナント博士をむかえておこなわれた全国高校教育セミナー報告書』（民主教育協会、1961）3頁。
- 34) 江藤淳, リチャード・フィン「対談 戦後48年占領体制を抜け出せたか：日本を知らなかったマッカーサーの日本改造」『This is 読売』（1994年1月

- 号) 106頁。
- 35) グラス・フィン (向井啓雄訳) 「今日の日本の大学——その日本的性格を分析す」『アメリカーナ：人文・社会・自然』第1巻第3号 (米国大使館文化交換局出版課, 1955年) 18頁。
- 36) 同19頁。
- 37) 同23頁。

★注で触れなかった参考文献

- 居神浩「格差社会における教育の機能——非選抜型大学の視点から」『日本経済の課題と将来を考える——学際的アプローチ』(ミネルヴァ書房, 2009)
- 木戸裕「ボローニャ・プロセスとドイツの大学改革」『ドイツ研究』45号 (日本独逸学会, 2011)
- 小林敏明「ネオ・リベラルの大学改革と人文学の危機——ドイツの現状報告」西山雄二編『人文学と制度』(未来社, 2013)
- 寺崎昌男「日本の大学における欧米モデルの選択過程」『大学史研究通信』Ⅱ (日本図書センター, 2004) (初出1974)
- オーテス・ケーリ『真珠湾収容所の捕虜たち——情報将校の見た日本軍と敗戦日本』(ちくま学芸文庫版, 2013) (初出1950)
- 「グローバル化が進むドイツ大学改革事情」『カレッジマネジメント』116号 (リクルート進学総研, 2002)